

## 「縮図」②

報告者：西澤忠志

### 1. 梗概

本章は、加藤周一が第一高等学校（以下、一高）に在学した最後の期間である3年生（1938～1939年）の時期に起きた一高寄宿寮内での出来事と、それに対するインテリ（一高生）たちの態度を通じて、一高寄宿寮をインテリと同時代の社会とが乖離、あるいは対立する「縮図」として描写している。加藤周一が在学していた昭和10年代の一高生は、同時代の社会情勢と距離を置きつつ、自身の信念に基づいて社会で使われていた言葉を論じる、独立した気風を持っていた。これはマルクス主義に代表される、同時代の「世界（より正確に言えばヨーロッパ）」とつながりを持っていた文芸や思想を 수용することによって得たものである。こうした態度は同時代の社会とのつながりを断ったうえで行われたものではあるが、同時代の社会で使われていた言葉を「正確に」見定めようとする上では大いに役立った。これが実践されたのが、政府による戦時標語に対する態度や横光利一との座談会においてである。

加藤はこれらの体験を通じて、思想的根拠を持ったうえで、その言葉を正確に理解しようとする、同時代の社会を外から論じる際の視点（「高みの見物」）を得た。それと同時に、加藤は自身の思想と社会とのズレを自覚することとなった。

### 2. 全体の構造

- ・「駒場」～「縮図」…1936年4月～39年3月、一高理科乙類に在学中（17～20歳）
- ・「二章ごとに関連のある話題が取り上げられている」という視点に従えば、
  - ・「高原牧歌」…軽井沢（追分）で過ごす人々
  - ・「縮図」…東京（第一高等学校）での学生たち→いずれも、同時代の社会と距離をとった同年代の人々
- ・「駒場」「戯画」「縮図」までの一高での生活を記述した中での位置づけ
  - ・「駒場」…庭球部に所属していた時期の生徒（上級生）とのつながり（1、2年生）
  - ・「戯画」…教師とのつながり（1～3年生？）
  - ・「縮図」…文芸部に所属していた時期の生徒（同級生）とのつながり（3年生）→より親しい人々とのつながりに、視点が移る
- ・書誌情報  
『朝日ジャーナル』9巻7号（1967）112-117頁  
『羊の歌』（旧版）148-160頁  
（新版）167-181頁

### 3. まとめ

第1パラグラフ（旧版148頁、改版167～168頁）…大多数の一高生の動向

第2パラグラフ（旧版148～149頁、改版168～169頁）…少数の一高生（加藤も含む）の動向

第3パラグラフ（旧版149～150頁、改版169～170頁）<sup>1</sup>

しかし駒場の学生と東京の文士論客との間には、決定的なちがいはなかったわけではない。私たちは文筆を業としてはいなかった。ものを書くことによって妻子を養う必要はなく、むしろ逆に親から養われて、何の障害も感じていなかった。学問や文芸や思想の商品化が何を意味するかを、私たちは、自分自身の経験としては、全く知らなかった。文章の商品化、商業的な新聞や雑誌を通じての大衆との接触、従って政治権力の介入、同時に新聞雑誌の自己検閲とそれに伴う大衆の嗜好の変化、その大衆の変化への新聞雑誌の側からの適応、その全体を包む時代の流行に従わないことによって文筆業者が感じるだろう生活上の脅威、またそれに従うことによって感じるだろう自己の立場の正当化の必要…そういうことのすべてを私たちは知らなかったから、私たちには、時代と共に流されてゆく文士論客の節操の無さと、それを正当化しようとする彼らの理くつにつじつまの合わなさ加減だけが、めだってみえた。私たちは抽象的で無慈悲な批判者であった。

下線…「駒場の学生」にかかわる記述

点線…「東京の文士論客」にかかわる記述

● 「時代と共に流され」た「東京の文士論客」は誰を指すのか？

= 「転向」し、戦争賛美のために動いた文学者・評論家か？

例：日本浪漫派（保田与重郎、亀井勝一郎）

・「転向」：広い意味…ある一つの思想的立場から他の思想的立場への転換

狭い意味…1930年代の日本で、共産主義者が権力の強制に屈して革命運動を離れ、その思想を放棄し、さらには天皇制思想に従った歴史上の出来事<sup>2</sup>

・「転向」した<sup>3</sup>文学者…島木健作、山本有三、埴谷雄高、徳永直

評論家…林房雄、大宅壮一、保田与重郎、亀井勝一郎

・保田与重郎、亀井勝一郎も学生時代にマルクス主義に傾倒し、「転向」した後に『日本浪漫派』を創刊

<sup>1</sup> 下線は発表者による

<sup>2</sup> 北河賢三「てんこう【転向】」『国史大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-21)

<sup>3</sup> 『共同研究 転向』で名前が挙げられている文学者、評論家をあげる

- 「東京の文士論客」は同時代におけるメディアの状況と深くかかわる

#### 学問や文芸や思想の商品化

- ・昭和時代に入ると、出版社によって学術本が安値で売り出される。

例：岩波文庫（1927年刊行開始）

- ・「文化財」としての価値を持つ本を文庫化、帝大出身者（「官学アカデミズム」）に翻訳や解説を依頼

- ・岩波文庫…官学アカデミズムのお墨付きを得ることができる

官学アカデミズム…より広い人々に名を知らしめることができる

→著者と出版社とが相互依存する関係

青年層に学校での「刻苦勉励」によって得ることのできる、西欧を中心とした文化が紹介<sup>4</sup>

⇒「岩波文化」の成立

- ・様々な分野の論文・評論や創作などを総合的に掲載する雑誌<sup>5</sup>「総合雑誌」（『文芸春秋』、『中央公論』など）が人気を博す

- ・マスメディアの発展に伴い、大量生産、伝達、消費を前提とする大衆的な文学<sup>6</sup>「大衆文学」が人気に

例：時代小説（吉川英治『宮本武蔵』など）

#### 商業的な新聞や雑誌を通じての大衆との接触

- ・出版社と読者との交流が盛んになる

例：『キング』…短歌、俳句、写真、小説の投稿を募集、懸賞を実施し当選者を公表

→「マス」メディアへの「パーソナル」な参加意識をあおる<sup>7</sup>

- ・同時代の文学界の問題として、「大衆」との関わりが取り上げられる

例：大衆文学に対する脅威から、「大衆」に寄り添った創作を求める

#### 政治権力の介入、同時に新聞雑誌の自己検閲とそれに伴う大衆の嗜好の変化

- ・新聞雑誌の検閲は明治時代から「新聞紙条例」などで実施

- ・昭和時代…大衆の嗜好を検閲によって操作する動き

例：社会的不満やマルクス主義から目をそらさせる目的で「エロ」関係は見逃される<sup>8</sup>

- ・出版社による「内閲」…出版社からの届け出により、事前に検閲処分となりうる記事の検閲をすること

日中戦争以後、事前に発禁処分を回避できることから積極的に行われる<sup>9</sup>

<sup>4</sup> 竹内洋「解説」村上一郎『岩波茂雄と出版文化：近代日本の教養主義』講談社（2013）

<sup>5</sup> 「そうごう - ざっし【総合雑誌】」『デジタル大辞泉』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-27)

<sup>6</sup> 尾崎秀樹「大衆文学」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-27)

<sup>7</sup> 佐藤卓己『『キング』の時代：国民大衆雑誌の公共性』岩波書店（2002）232頁

<sup>8</sup> 田崎宣義「都市文化と国民意識」『講座日本歴史 10（近代 4）』東京大学出版会（1985）181頁

<sup>9</sup> 中園裕『新聞検閲制度運用論』清文堂出版（2006）

## その大衆の変化への新聞雑誌の側からの適応

例：『キング』（1925-1957）

- ・ 講談社発行の大衆娯楽雑誌
- ・ 年齢・性別・職業・地位を超えた万人向雑誌を目的に、成功談や道徳教訓物語、吉川英治らの大衆文学を掲載
- ・ 当時、新しいメディアであったラジオや映画、レコードにも進出  
例：キングレコード
- ・ 満州事変後、軍隊関連の美談や戦地の様子を写したグラビア、軍隊関連の人物の談話を掲載  
戦前、戦中において安定した売り上げ

→年齢・性別・職業・地位を超えた「国民」向けのメディアとして人気を博す  
時勢や大衆の人気によって記事内容、メディアを変化させる傾向

その全体を包む時代の流行に従わないことによって文筆業者が感じるだろう生活上の脅威、またそれに従うことによって感じるだろう自己の立場の正当化の必要

・「転向」した理由<sup>10</sup>

- ① 戦争が始まった以上、負けてはならないから
  - ② 国民の大部分が苦しんでいるのにも関わらず、自分だけ安閑としていられないから
- 「日本のため、民衆のために変わる」という信念に従う

・「転向」した理由の割合<sup>11</sup>

	合計	信仰上	家庭関係	理論的矛盾の発見	国民的自覚	身上関係	拘禁による後悔	その他
共産主義	2403	52	677	299	768	232	299	76
割合	100	2	28	12	31	9	12	3

・ 生活を守るために「転向」した経験を文学として発表…「転向文学」

● 時流に流される「東京の文士論客」に対する青年層の反応

そういうことのすべてを私たちは知らなかったから、私たちには、時代と共に流されてゆく文士論客の節操の無さと、それを正当化しようとする彼らの理くつにつじつまの合わなさ加減だけが、めだってみえた。

- ・ 同時代の加藤の反応…「マルキシズム」『青春ノート 3』（1939）
- ・ ほかの一高生の反応

例：中村眞一郎<sup>12</sup>

変わった人々に対する反発⇔変わらなかった人に対する尊敬

→同時代の加藤と同じく「少数」の一高生の中では共有されていた認識

<sup>10</sup> 中村眞一郎『戦後文学の回想 増補版』筑摩書房（1983）42頁

<sup>11</sup> 鶴見俊輔「序言 転向の共同研究について」思想の科学研究会編『共同研究 転向1 戦前篇. 上』52-53頁から抜粋

<sup>12</sup> 上同 42頁

- なぜ「私たちは抽象的で無慈悲な批判者であった。」とまとめたのか？
- ・加藤による戦時中の知識人への批判のポイント…「思想」と「生活意識」とが離れていること

思想は、危機的な場合には、実生活の側からの要求に屈服した。〔……〕一言で言えば、実生活と離れた思想は、実生活に対し、超越的な価値概念も、真理概念も、つくりだすにいたらなかった。これこそ知識人の戦争協力という事実の内側の構造であったということになる<sup>13</sup>。

思想と生活が離れる理由

- ・思想がほとんど外来のものであり、生活にまで浸透するものではないから
- ・浸透したにしても、キリスト教や仏教が「神ながらの道」（日本の土着思想）を変えらなかったこと

（後述することになるが）

- ・一高生の一部は、マルクス主義や日本の古典文学といった、外部の思想に基づいて実生活を論じる

思想を生活に合わせる形で合理化、煽る（京都学派、日本浪漫派）

⇔

思想に基づいて、生活を批判的な視点で論じる（一部の一高生）

➤ 生活に寄り添い過ぎたことは、加藤の戦時中の知識人に対する批判のポイント

## ● 構造

生活との関わりから世相に従う「東京の文士論客」⇔それを批判する生活と関わりのない<sup>14</sup>「駒場の学生」  
→対立するポイント：「生活」との関わり

<sup>13</sup> 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第4』筑摩書房（1959）〔『加藤周一自選集2』（2009）401-402頁〕

<sup>14</sup> この加藤を含む文芸を愛好していた学生が同時代の「生活」と隔絶していたことは、『朝日ジャーナル』掲載時には、より明確に書かれている。以下、『朝日ジャーナル』掲載の文章（下線は岩波文庫版で削除された部分を発表者が明示するために加えたもの）「私たちは文筆を業としてはいなかった。ものを書くことによって妻子を養う必要はなく、むしろ逆に親から養われて、生活とは別に、学問や文芸を考え、みずから好むところへ赴くのに、何の障害も感じていなかった。」（「羊の歌14 縮図」『朝日ジャーナル』1967年2月12日号、113頁）

その頃の政府は、「国民精神総動員」と称して、むやみに多くの標語をつくり出していった。「ぜいたくは敵だ」—「冗談ではない」と私たちのなかのマルクス主義者はいった、「低賃銀を支えにして育ててきた資本主義国ではないか。食うや食わずの大衆に向って、ぜいたくは敵だものだ」。また、「大和魂、武士道、葉隠……」—「一体この連中は本居宣長をまじめに読んだことがあるのだろうか」と私たちのなかの学者はいった、「宣長の和心はものあわれですよ。あれは源氏物語の恋の世界だ。武士道は、江戸時代に武士の規律がゆるんで手がつけられなくなったから、役人がこしらえたものです。江戸時代のその一面だけを捉えて、大和魂を代表させるわけにはゆかない」。理くつを好まず実行を尊んだ連中は、酒を呑み、女に戯れ、「雪国」と「濠東綺譚」を尊敬し、軍国主義的な言論を相手にもしなかった。「八紘一宇」という標語の意味は、誰にもはっきりしていなかったが、「日本は神国」であるとか、「東洋の精神文明」の伝統だとか、そういう申し分とどこかで結びついていて、私たちには頭の悪い時代錯誤としか思われなかった。しかし駒場の外の世界では、そのとき、マルクス主義者の弾圧に、自由主義的な学者の教職追放がつづき、流行の論客たちが、賑かに、わかりにくい言葉で「戴冠詩人の御一人者」とか、「殉国精神」とか、「信仰の無償性」とかいうことを叫びたてていたのである。京都の哲学者と雑誌「文学界」と文学者たちは、もう少し静かな言葉で、もう少しもっともらしく、大日本帝国が中国を征伐するのには崇高な目的があるはずだといひ、西洋の近代文化は行きづまっているから、日本人である我々が「近代」を超えた文化を建設したいものなどといっていた。とめどもなく進んでゆく軍国主義的風潮のなかで、寮の内側と外側には、大きないちがいが生じようとしていた。そのくいちがいは、その頃「小説の神様」といわれていた横光利一氏が第一高等学校で講演するのに及んで、爆発したのである。

- 構造

- ・ 同時代に発表された「標語」や評論に対する反応を巡る対立

社会情勢⇔一高生

- 同時代（1938年ごろ）の社会情勢（「駒場の外の世界」）

- ① 戦時における国民動員に関わる制度の整備…例：国家総動員法<sup>16</sup>の制定（1938）

- ・ 戦時期（1937～1945）の「標語」

---

<sup>15</sup> マーカー、下線はそれぞれの発言の対応関係を示すため、発表者がつけた

<sup>16</sup> 戦時においてすべての資源、資本、労働力から貿易、運輸、通信その他あらゆる経済部門に国家統制を加え、国民の徴用、争議の禁止、言論の統制など、国民生活を全面的に国家の統制運用に服せしめる権限を政府に付与した授權法。日中戦争中に、同法に基づく勅令として、国民徴用令、国民職業能力申告令、価格等統制令、生活必需物資統制令、新聞紙等掲載制限令その他の統制法規がつくられ、41年大幅な改正が行われて罰則なども強化された。太平洋戦争に突入すると、その適用は拡大され、国民生活を全面的に拘束した。長幸男「国家総動員法」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-22)

- ・1937年に始まった「国民精神総動員運動<sup>17</sup>」を受け、「時短」の呼びかけや標語が作られる<sup>18</sup>
- ・あくまで上意下達による精神面での引き締めを呼びかける運動
- ・多くのデザイナー、写真家が関わる

例：花村安治

こうした動きの一つとして、「ぜいたくは敵だ<sup>19</sup>」「八紘一字<sup>20</sup>」（1940年発表）がある

→それまでの生活と日常とを作り変える役割を果たす<sup>21</sup>

## ② 思想弾圧

- ・マルクス主義者への弾圧…既述
- ・自由主義的な学者の教職追放…例：矢内原事件<sup>22</sup>
  - ・1937年に東京帝国大学教授（当時）矢内原忠雄<sup>23</sup>が『中央公論』に論文「国家の理想」を発表
  - ・戦争は国家の理想に反するとして暗に政府の大陸政策を批判したところ、検閲により全文削除処分、右翼からの攻撃を浴びた
  - ・教授会内での批判に続き、文部省は、同年に行われた矢内原の講演「神の国」の終りに「日本の理想を生かすために、一先づ此の国を葬って下さい」と述べたことを問題視
  - ・矢内原は辞表を提出、依願免官となった

→学内外で、国家への批判を含む自由な研究が制限される

同時代の加藤も深刻な問題としてとらえる<sup>24</sup>

<sup>17</sup> 日中全面戦争の開始に伴って始められた、国民の戦争協力を促す官製国民運動。当初は精神運動の性格が強かったが、やがて長期戦下の経済国策への協力を中心とするようになり、貯蓄増加や国債消化の奨励、金属回収などがしだいに強力に実施されていった。

赤澤史朗「国民精神総動員運動」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-22)

<sup>18</sup> 大塚英志『「暮し」のファシズム』筑摩書房（2021）19頁

<sup>19</sup> 1940年に発令された貴金属、高級織物などの奢侈ぜいたく品の製造と売買を禁止した「奢侈品等製造販売制限規則」を受けて作られたスローガン。

森川方達『帝國ニッポン標語集：戦時国策スローガン・全記録』現代書館（1995）211-212頁

<sup>20</sup> 1940年8月、第二次近衛内閣が基本国策要綱で大東亜新秩序の建設をうたった際に公式に使われた、すべて「大東亜共栄圏の建設、ひいては世界万国を日本天皇の御稜威の下に統合し、おのおのの国をしてそのところを得しめようとする理想」を表明する言葉。古川哲史「八紘一字」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-01-13)

<sup>21</sup> 大塚英志『「暮し」のファシズム』筑摩書房（2021）100頁

<sup>22</sup> 石井寛治「やないはらじけん【矢内原事件】」, 『国史大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-23)

<sup>23</sup> （1893-1961）大正-昭和時代の経済学者。新渡戸稲造や内村鑑三の影響をうけ無教会派クリスチャンとなる。1923年東京帝大教授。植民地政策を担当し、1937年発表の論文「国家の理想」が反戦的とされ辞職。1951年東大総長。「やないはら-ただお【矢内原忠雄】」『日本人名大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-23)

<sup>24</sup> 『校友会雑誌』に掲載された「正月」の草稿（『青春ノート1』 <https://trc->

### ③ 評論の流行

- 「流行の論客たち」 = 「日本浪漫派」に連なる人々のことか
- ・「戴冠詩人の御一人者」…保田与重郎『コギト』第50号(1936)掲載の評論

1938年に評論集として出版される

日本武尊を、英雄であるとともに日本語の美を表現した詩人として評価

日本武尊を戴冠の詩人と云ふはあるひは不当かもしれない。さらに御一人者といふのは比較の後のやうに恐惶を感ぜられる。たゞ尊の片歌を愛誦し、この薄明の貴人の生涯の美しさにむしろ感傷に似た慄れを感じてきた少年の日を思つたからである。〔……〕日本武尊は日本のもつよも上代の一人の武人の典型であつたから、又日本の詩人の典型であらせられた。詩人であつたから意味があるといふだけでなく、武人であつたから同時に思つて意義がある。この壮大な二つの調和は、おそらく僕らの環境と教育の中で与へられなかつた。現代に若者が今日になつて文人としての尊の詩人を論じねばならぬことを、僕は日本新文学における宇宙精神の欠如と嘆き、新文学における国際の心の欠乏と嘆じるのである<sup>25</sup>。

- ・「殉国精神」…南朝、勤王家の人物の中でも志半ばに死んだ人物を評しての言葉  
例：石井三郎(剣道家・政治家、1880-1948)「大塔宮<sup>26</sup>と大義殉國精神」『剣をとるも執らぬも』(1939)
  - ・「信仰の無償性」…亀井勝一郎『文学界』8巻11~9巻4号(1941)掲載の評論  
「転向」経験と親鸞をきっかけに、人生における「信仰」(「神」の存在)を論じる
  - ・「日本浪漫派」(特に保田)の「精緻をのちに期して、いらだたく拙速を尊びたい気持」を持った文体は、不安と危機感に反応し絶対的なものを追求する青年層に影響<sup>27</sup>
- 加藤の評価…「言葉の綾」で魅惑する<sup>28</sup>

---

[adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun\\_notel/?p=21](http://adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun_notel/?p=21))には、「私」(加藤周一)が「先生」に、矢内原忠雄と思われる、最近大学を辞職したY教授の話をする場面が出てくる。「私」は「現在、この国の社会的傾向に対する種々の立場の問題を必然的に含」み、「社会的傾向と教育との問題として大に私たちに密接な」問題関心を持っていたが、「先生」に「国の方針とたがへば、仕方がないね」と一言で終わらせられてしまい、肩透かしを食らった気分を抱いた。

<sup>25</sup> 保田与重郎「戴冠詩人の御一人者」『林房雄・亀井勝一郎・保田与重郎・蓮田善明集』(現代日本文学大系 61) 筑摩書房(1970) 234-235頁

<sup>26</sup> 後醍醐天皇の第1皇子で足利尊氏と反目した護良親王(1308-1335)のこと。

<sup>27</sup> 橋川文三「日本浪漫派批判序説」『橋川文三著作集』筑摩書房(1985) 37頁

<sup>28</sup> 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第4』筑摩書房(1959)〔『加藤周一自選集 2』(2009) 383頁〕

- 「京都の哲学者」「雑誌「文学界」と文学者たち」…戦争の合理化を進める

例：三木清「現代日本に於ける世界史の意義」（1938年）<sup>29</sup>

日中戦争の世界史の立場から見た「世界史的意味」を探る

戦争を通じた「東洋」の形成（統一）を「世界史的意味」とする

「東洋」の統一＝日中相互の文化の尊重、資本主義の矛盾の解消、科学的文化によって成される  
≠日本の制覇

→事後解釈的な戦争の正当化は、京都学派による座談会「世界史的立場」（1943）でも行われる<sup>30</sup>

「大日本帝国が中国を征伐するのには崇高な目的があるはず」

例②：座談会「近代の超克」…1942年に行われ、同年『文学界』に掲載された座談会。

京都学派（西谷啓治、鈴木成高、下村寅太郎）、『文学界』に参加していた  
文芸評論家（小林秀雄、亀井勝一郎）など13名が参加<sup>31</sup>

- ・太平洋戦争、シュペングラー<sup>32</sup>の「西洋の没落」を受け、日本文化を「近代の超克」という言葉で  
対外的に発信しうる思想を作ろうとする<sup>33</sup>

「西洋の近代文化は行きづまっているから、日本人である我々が「近代」を超えた文化を建設したいもの  
だ」

→加藤の評価…「論理の綾」で魅惑する<sup>34</sup>

⇒「言葉の綾」、「論理の綾」によって当時の青少年を魅惑する<sup>35</sup>

◇ 一高生の反応

- 「ぜいたくは敵だ」への「マルクス主義者」の反応…

「低賃銀を支えにして育ててきた資本主義国ではないか。

食うや食わずの大衆に向って、ぜいたくは敵だもないものだ」

<sup>29</sup> 三木清「現代日本に於ける世界史の意義」『東亜協同体の哲学：世界史的立場と近代東アジア：三木清批評選集』書肆心水（2007）315-320頁

<sup>30</sup> 鈴木貞美『近代の超克：その戦前・戦中・戦後』作品社（2015）308頁

<sup>31</sup> その他の参加者は以下の通り。諸井三郎（音楽評論家）、菊池正士（物理学者）、吉満義彦（神学者）、林房雄、中村光夫、河上徹太郎（以上文芸評論家）、三好達治（詩人）、津村秀夫（映画評論家）

<sup>32</sup> シュペングラー-Spengler, Oswald (1880-1936) ドイツの歴史哲学者。主著『西洋の没落』（1918-1922）で、人類の諸文化は相次いで生成、発展、死滅するものであり、ヨーロッパのキリスト教文化は、終末に近づいていると予言。第一次大戦を経てヨーロッパ近代への懐疑を強めていたヨーロッパ社会で大きな反響を呼んだ。「シュペングラー (Spengler, Oswald)」『岩波 世界人名大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-01-11)

<sup>33</sup> 鈴木貞美『近代の超克：その戦前・戦中・戦後』作品社（2015）316頁

<sup>34</sup> 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第4』筑摩書房（1959）〔『加藤周一自選集2』（2009）383頁〕

<sup>35</sup> 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第4』筑摩書房（1959）〔『加藤周一自選集2』（2009）383頁〕

・なぜそう言ったのか？

・マルクス主義者による同時代の資本主義に対する理解

例：『日本資本主義発達史講座<sup>36</sup>』

・日本で明治維新以降、資本主義が急速に発展した理由<sup>37</sup>…地租改正などの土地改革を契機に、

・一部の人々（地主、高利貸し、商人）に土地や生産手段が集中する

・農民は土地と生産手段を奪われ、労働者として搾取されることとなる

・これによって資本主義は発達する一方で、農業は従来の「地主一小作農」の関係に依存する  
→小生産者・賃金労働者である貧農大衆は、低い労働条件の下で働かされ続ける<sup>38</sup>

→大多数の労働者は贅沢をする余裕のない中で生活しているのに、ぜいたくする余裕はあるのか？

● 「大和魂、武士道、葉隠……」への「私たちのなかの学者」の反応…

「一体この連中は本居宣長をまじめに読んだことがあるのだろうか」

「宣長の和心はものあわれですよ。あれは源氏物語の恋の世界だ。武士道は、江戸時代に武士の規律がゆるんで手がつけられなくなったから、役人がこしらえたものです。

江戸時代のその一面だけを捉えて、大和魂を代表させるわけにはゆかない」

・「大和魂、武士道、葉隠」…戦時中に賞賛された言葉、本

・「大和魂<sup>39</sup>」

・漢詩文を読んだり作ったりする能力、あるいは漢籍に関する学識に対して、日本風の知恵・才覚を指す語として、平安時代から用いられる

・幕末から明治にかけて、国粹主義が激しく高揚する中で、民族性をいさぎよく勇敢なものとして誇示する言葉となり、天皇制国家のもとで、天皇の赤子（臣民）の持つべき心構えとされる

・「武士道」

・武士の道徳論を指す言葉として近世から存在

・人口に膾炙したのは新渡戸稲造『武士道』（1899、邦訳1907）が刊行されて以降

・主従関係を前提に考えられたものだが、明治時代以降、天皇を中心とする国民の道徳として取り上げられる

・戦時中に「武士道」を説明する際に挙げられたのが『葉隠』<sup>40</sup>

---

<sup>36</sup> 第二次世界大戦前の日本資本主義をマルクス主義の立場から初めて包括的に解明した講座。全七巻。1932年から翌年にかけて岩波書店から刊行。明治維新以来の日本資本主義発達の諸条件、その本質的諸特徴、その基本的諸矛盾を全面的に分析し、戦争とファシズムを阻止し、社会変革の道を指し示すことに最大の意義をみいだした。中村政則「日本資本主義発達史講座」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-01-11)

<sup>37</sup> 野呂栄太郎『日本資本主義発達史』鉄塔書院（1930）323頁

<sup>38</sup> 同上 337頁

<sup>39</sup> 日野竜夫「やまとだまし【大和魂】」『国史大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-01-11)

<sup>40</sup> 『万葉集』など日本文化の「武士道」を解説した『武士道読本』（1939）では、教育学者乙竹岩造が『葉隠』を取り上げている。

・『葉隠』<sup>41</sup>

・江戸中期の教訓書、武士の修養書。

・肥前（佐賀）鍋島氏の家臣山本常朝（1659-1719）が武士の生き様について語った談話をベース

・元禄以降の鍋島武士の「御国ぶり」が急速に失われていく現状を嘆いたのがきっかけ

・極端な尚武思想に貫かれているので、藩中でも禁書・奇書の取り扱いを受け、公開を禁じられる

・明治中期以降、再認識され、広く一般にも読まれるようになる

・なぜ一高生は本居宣長を出したのか？…「敷島の大和心を人とわば、朝日ににおう山桜花」が  
「大和心」を表現した和歌と見なされたから<sup>42</sup>

・戦中の本居宣長の歌に基づく「大和心」解釈

・桜を美しく咲き、潔く散る象徴とし、そこから大和心（＝武士道）の本質をみる<sup>43</sup>

例：保田与重郎、『愛国百人一首』（1942年発表）

・散る桜のイメージを批判する見方<sup>44</sup>

例：川田順（歌人）…麗らかな朝日に照らされ、「朝日ににおう」山桜花を詠んだ歌であるため、  
散り際を詠ったものではない

山田孝雄（国文学者）…潔く散ることや武士道と一致することを通じて、桜の花を日本精神の  
象徴と見なすことは、真に桜の花を認めたことにはならない

・国文学者の評価が高い本居宣長による業績の一つ…『紫文要領』『源氏物語玉の小櫛』<sup>45</sup>

・いずれも、『源氏物語』を「もののあはれ」を表現した最高の作品と評価

⇒日中戦争以降に持て囃された本居宣長の本…『直毘霊』、『馭戒慨言』（「漢意」批判を中心とする本）

・本居宣長の評価のポイント…不義密通の「恋」を犯す光源氏を通じて、不義や姦淫を戒める共同体の  
掟に逆らってしまう個人の内面をすくい取る「文学」の本性を指摘<sup>46</sup>

→国文学や和歌に親しんでいけば出てくる「大和心≠武士道≠本居宣長」の解釈

- 「理くつを好まず実行を尊んだ連中」…「酒を呑み、女に戯れ、「雪国」と「溷東綺譚」を尊敬し、  
軍国主義的な言論を相手にもしなかった。」

---

<sup>41</sup> 渡邊一郎「葉隠」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>,  
(参照 2021-12-22)

<sup>42</sup> 「敷島の～」の歌を「大和心」を詠んだ歌の代表とみなす例は、新渡戸稲造『武士道』からみることが  
ができる。田中康二『本居宣長の大東亜戦争』ペリかん社（2009）134-135頁

<sup>43</sup> 田中康二『本居宣長の大東亜戦争』ペリかん社（2009）136-137頁

<sup>44</sup> 上同 142-143頁

<sup>45</sup> 上同 178頁

<sup>46</sup> 小谷野敦『男の恋の文学史』朝日新聞社（1997）36頁

・ 誰のことを指すのか？

① 戦時中の社会の大勢に流されず、あえて無関心を装った人々

「雪国」、「濶東綺譚<sup>47</sup>」…戦争とはかかわりのない文学作品

あえて、戦争とかかわりのないものを愛好することで抵抗の意思を示す<sup>48</sup>

例：堀辰雄、宮本百合子…戦争協力はせず、傍観する

② 政治に無関心な大多数の一高生

知識人の政治への無関心は「新しき星董派に就いて<sup>49</sup>」の中でも論じられる

▶ 同時代の社会と一高生の認識とのギャップ

戦争に進みゆく社会情勢の中で抵抗することのできた実例を示す

「とめどもなく進んでゆく軍国主義的風潮のなかで、察の内側と外側には、大きくいちがいが生じようとしていた。」

→横光利一の第一高等学校での講演で爆発

---

<sup>47</sup> 永井荷風の長編小説。1937年刊。老作者「わたくし」は、浅草から隅田川の向こう玉の井のあたりを散歩の途中、夕立にあい、傘に入れてやった私娼窟の女お雪と馴染みになる。そのうち、女が彼を頼って自前になろうという夢をみ始めたので、仲秋の明月の夜、彼女に「裕」代を贈ったのを最後として、これ以上、深い関係になることを避け、以後相会うことを断念する。

竹盛天雄「濶東綺譚」『日本大百科全書(ニッポニカ)』, JapanKnowledge,

<https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-22)

<sup>48</sup>加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第4』筑摩書房(1959)〔『加藤周一自選集2』(2009) 374頁〕

<sup>49</sup> 「星董派は無力であるのみならず無学である。人間に関する知識に乏しく、社会的歴史的問題に関しては小児の判断直も有せず、その故に哲学と詩とを唱えて、恰も芸術の擁護者の如く自ら称しながら、その哲学と詩とに就いても、『悲歌』を読み、『存在と時間』を読むものさえはなはだ少い。〔……〕社会的立つ場に熱情を有しないのみならず、手宇賀邦、芸術に、詩の形式に、文学的教養そのものさえも熱情を有しない。従ってそのいずれをも自分のものとしていない。彼等が狂信家の騒動から面を背けたのは、意識的な孤独の追求でなく、動物的な逃避反射である。彼らが歴史的社会的現実を去ったのは、詩や哲学に対する熱情のためではなく〔……〕歴史的感覚の欠如のためである。」「新しき星董派について」『加藤周一自選集1』88頁〕

横光氏は定刻に集った学生で立錐の余地もない大教室にあらわれた。蓬髪で顔色いくらか青ざめ、その話し振りは、一語を発すると、かたく口を結んでしばらく天井の一角をみつめ、また一語を発するという風であった。思いついたことを立て板に水の如くまくしたてるのでもなく、言葉の綾で効果をねらおうとするのでもない。その場で記憶をよびさましながら、考えをまとめようとして言葉を探す横光氏は、苦吟する詩人のようにみえた。出まかせと気取りからそれほど遠い話し手も少かったろう。話の内容には承服できないことが多かったが、私はその人柄に好意を感じた。激論がはじまったのは、その講演会が終わった後、私たちが粗末な茶菓を用意した座談会の席へ移ってからである。集った十五人ばかりの学生は、横光氏をかこんで車座になっていた。

● 横光利一（1898－1947）の座談会までの経歴<sup>50</sup>

小説家。福島県生まれ。1916年早稲田大学高等予科に入学。早大時代は、学業に専念せず中退。

1923年：菊池寛創刊の『文芸春秋』に参加、『日輪』『蠅』などの作品により文壇に登場。

1924年：川端康成らと『文芸時代』を創刊、短編小説『頭ならびに腹』により「新感覚派」と呼称されるようになる。

1925年以降：昭和初年代の文学理論を支配した『文学』『詩と詩論』『作品』などに参加、河上徹太郎、小林秀雄らを通じて、ジッド、ヴァレリーの影響を方法化しようとする

1933年：『文学界』同人となる。「純文学にして通俗小説」という「純粹小説」理論を打ち出し、長編小説の効用を説く。

1936年：二・二六事件の直前に欧州へ向かう。約半年のヨーロッパ滞在から感じた「西洋と東洋」の本質的な違和感から『旅愁』にとりかかる。

● 横光利一の一高での講演会・座談会

・一高内での講演会・座談会…OBや同時代に活躍していた文学者、評論家を弁論部、国文学会などの団体が呼んで、開催

・「国文学会」…1934年設立の、文学を愛好する一高生によって設立された学内団体。

国文学の古典や、明治時代以降の文学、海外文学といった、様々な文学への興味関心のもと、国文学の教授による古典読解、能や歌舞伎、人形浄瑠璃といった伝統芸能の鑑賞、講演会・座談会を主催した<sup>51</sup>

・『万葉集』、『新古今和歌集』だけでなく、プルースト、リルケ、萩原朔太郎、中原中也、立原道造等の抒情詩を愛好し、ドイツ観念論、京都学派、日本浪漫派は好まれず<sup>52</sup>

→一高文学青年のたまり場<sup>53</sup>、自由な批判精神が働く場となる<sup>54</sup>

<sup>50</sup> 栗坪良樹「横光利一」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-12-23)

<sup>51</sup> 「国文学会」『向陵誌 駒場篇』一高同窓会（1984）

<sup>52</sup> 宗左近「みやび」『青春風土記：旧制高校物語 3』朝日新聞社（1979）

<sup>53</sup> 網代毅『旧制一高と雑誌「世代」の青春』福武書店（1990）93頁

<sup>54</sup> 中村眞一郎『戦後文学の回想 増補版』筑摩書房（1983）50頁

- ・国文学会主催の講演会…佐々木信綱、菊池寛といった、同時代に活躍していた文学者<sup>55</sup>
  - ・国文学会での加藤周一…中村眞一郎との文芸委員同士のつながりから参加<sup>56</sup>  
(国文学会に所属していない生徒も自由に参加できたため)
  - ・横光利一を呼んだ講演会・座談会は国文学会主催によるもの<sup>57</sup>  
同時代の『向陵時報』、『同窓会会報』、『定本横光利一全集』には記載なし  
しかし、中村眞一郎や第三者(小平敦<sup>58</sup>)による回想の中にあるため、実際に開催されたか?
  - ・横光の座談会での加藤
    - ・日高普の回想「加藤さんの論争ぶりの見事さといったら、名人舞踊家のひと踊りをみるような感じで、見終わってホッとため息がでるほどの水際あざやかさだった<sup>59</sup>」
    - ・座談会での論争が一高内で語り継がれることとなる<sup>60</sup>
- 座談会での討論は中心的な役割を果たす?

- ・加藤による横光評価(『日本文学史序説』の前の時点での<sup>61</sup>)
  - ・戦時中の活動に対する批判…「日本と人民とを「理性の道」の外へ導いた戦争犯罪人<sup>62</sup>」
  - ・しかし、『旅愁』までの作品については・・・?

われわれは横光のなかに道に迷った一人の俳人をみた。彼ははじめ俳句をつくっていた。それから『機械』や『時間』を書いた。それがわれわれを魅惑したのだ。しかしいくさやみそぎや大東亜共栄圏や世界史の哲学は、才能ある小説家を、つまらぬデマゴグに変えてしまった。『旅愁』はデマ以外の何物でもない<sup>63</sup>。

<sup>55</sup> 網代毅『旧制一高と雑誌「世代」の青春』福武書店(1990)94頁

<sup>56</sup> 上同93頁

<sup>57</sup> 中村眞一郎『戦後文学の回想 増補版』筑摩書房(1983)51頁

<sup>58</sup> 「講演にきた横光利一の忘れ難い思い出もある」166頁〔小平敦「あの頃 南寮 内藤濯さん」『新墾：第一高等学校卒業半世紀記念文集』(1992)163-166頁〕

<sup>59</sup> いいだもも、中村稔、日高普「われらアプレゲールの青春——雑誌『世代』の軌跡」『世界』389号280-303頁(1978)

<sup>60</sup> 中村稔「加藤さんと『世代』の仲間たち」『加藤周一著作集 月報6』(1979)6頁

<sup>61</sup> 『日本文学史序説』では、意図は独創的であるが、芥川龍之介、中野重治、石川淳と比較する形で、日本語の語感、科学的なものの考え方や東西の文明に関する知識が欠けた、「翻訳の西洋文学と同時代の(または近代の)日本文学のみによって養われた最初の小説家」と評価している。

加藤周一『日本文学史序説 下』筑摩書房(1999)468頁

<sup>62</sup> 加藤周一「文学検察(五)横光利一」『文学時標』1946年4月1日号3頁

<sup>63</sup> 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第4』筑摩書房(1959)〔『加藤周一自選集2』(2009)400頁〕

・『機械』『旅愁』を読んでいたことは、「青春ノート」の記述から分かる<sup>64</sup>

・同時代の横光に対する評価は・・・？

例：「断片」「青春ノート 5」（1939）<sup>65</sup>

丹羽文雄の小説では特有の言葉使いが目立つ。心理風景の形容詞が新鮮で独特なのである。〔……〕さう云ふ心理描写の成果は心理の“場”を捉へてゐることだと思ふ。所が横光の心理小説では、心理の“すぢ書き”が問題になつてゐる。（心理と論理と云ふ彼自身のことばは之を裏書する。）心理の“すぢ書き”とは要するに心理の時間であるが、心理の“場”とは心理の重みである。〔……〕二人の作家のこの相違は必然的に主人公の性格の相違を導くのであって、丹羽の人物には“性格”があらはれ、横光の人物には“性格”がない。

・横光の講演での話しぶり…小説よりは分かりやすい

第6パラグラフ（旧版152頁、改版172頁）

「西洋の物質文明と東洋の文明ということが、横光さんの『旅愁』に出てきますね」と私たちのなかの一人がいった、「あれをもう少し説明していただけますか」「それは君、いわなくてもわかるだろう。精神文明は日本人の心のなかにあるものだ」「物質文明とは、科学のことでしょうか」「そうしてもよい」「技術のことでしょうか」「そうだ、科学技術だ」「ちょっと待って下さい、科学と技術とは、別の二つのことではないですか」「いや、関係が深い、ぼくはひとつのものと見ている」「しかし別の二つのものだから、関係ということがいえるので、同じひとつのものについては、浅くも、深くも、関係ということはいえないでしょう」「それは、君、理くつだよ」「しかし科学は理くつですね…」—という風にしてその議論ははじまったように思う。

### ● 『旅愁』

横光利一後期の長編小説。1937年から46年まで発表。

パリ、チロル、ウィーンを舞台に、日本の運命を議論する。特に人民戦線内閣樹立で沸き立つパリを中心に、「東洋と西洋」の違和感を根本に据え、伝統精神と科学精神、古神道とカトリックなど、当時の横光利一の作家的主題が集約されている<sup>66</sup>。

<sup>64</sup> 「“機械”を書いた横光氏は日本文学の伝統を近代に生かした人である。“機械”を抒情すること。」

〔「追加覚書」「青春ノート4」（1939）（[https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun\\_note4/?p=23](https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun_note4/?p=23)）〕

「横光利一氏の新しい小説「旅愁」をよんで、様々のことを考へた」〔「覚書Ⅰ」『加藤周一 青春ノート』（2019）193頁〕

<sup>65</sup> 「断片」「青春ノート5」（[https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun\\_note5v2/?p=28](https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun_note5v2/?p=28)）

<sup>66</sup> 栗坪良樹「旅愁」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2021-10-13)

● 議論の内容

一高生

西洋の物質文明と東洋の文明ということが、横光さんの『旅愁』に出てきますね。

あれをもう少し説明していただけませんか。

横光

それは君、いわなくてもわかるだろう。精神文明は日本人の心のなかにあるものだ。

一高生

物質文明とは、科学のことでしょうか

横光

そういってもよい

一高生

技術のことでしょうか

横光

そうだ、科学技術だ

一高生

ちょっと待って下さい、科学と技術とは、別の二つのことではないですか

横光

いや、関係が深い、ぼくはひとつのものと見ている

一高生

しかし別の二つのものだから、関係ということがいえるので、同じひとつのものについては、浅くも、深くも、関係ということはいえないでしょう

横光

それは、君、理くつだよ

一高生

しかし科学は理くつですね……

● 議論のポイント…横光が「物質文明＝科学技術」としたことに対し、「科学」と「技術」がそれぞれ分かれるかどうか

・横光にとっての「科学」<sup>67</sup>…自然科学の認識

- ・関東大震災をきっかけにした東京の都市化と科学技術による生活の変化を受け、それらによって変化した人間の感覚を表現しようとする
- ・アインシュタインの来日による、時間と空間を数式で表現する相対性理論がブームに
- ・横光の場合…数学を文学表現の中に取り込み、人間の心理、主観を自然科学的に認識し、表現しようとする

(⇨マルクス主義などの「社会科学」に基づくプロレタリア文学)

---

<sup>67</sup> 河田和子「科学と文学」『横光利一の文学世界』翰林書房（2006）198-201頁

- ・しかし、『機械』(1930)以降、自然科学の方法で心理を測ることの限界を感じたことから、ヨーロッパの科学主義(科学的合理主義、実証主義)を批判→『旅愁』へ
- ・戦中、近代科学と日本人の心性とを調和させた新しい世界認識を、古神道を通じて表そうとする